

修士論文（要旨）

2015年7月

中日接触場面における言語調整行動の実態

- 意味交渉を中心に -

指導 宮副ウォン 裕子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

213J3903

陳 希

Master's Thesis (Abstract)

July 2015

The Realities of Communicative Adjustment in Chinese-Japanese Contact Situations :  
Focusing on the Negotiation of Meaning

Chen Xi

213J3903

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Yuko Miyazoe-Wong

## 目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究動機	1
1.2	研究背景	1
1.3	研究目的及び課題	2
第2章	先行研究と本研究の位置	3
2.1	接触場面という概念の発見	3
2.2	第2言語習得における意味交渉及び調整行動研究	3
2.3	言語管理理論における意味交渉及び調整行動研究	7
2.4	本研究の位置づけ	8
2.5	本研究における用語の定義	8
第3章	調査概要と研究方法	10
3.1	調査概要	10
3.2	分析枠組み	12
3.3	分析手順	16
3.4	言語調整行動の抽出と認定基準	17
3.5	文字化の基準と表記法	18
第4章	NSとNNSにおける言語調整行動の全体的な特徴(RQ1)	19
4.1	達成促進型調整	19
4.2	視覚情報による調整	31
4.3	達成型調整	48
第5章	NSとNNSによる言語調整行動の特徴(RQ2)	50
5.1	NSによる言語調整行動の特徴	50
5.2	NNSによる言語調整行動の使用と特徴	57
第6章	総合的考察	70
6.1	本研究における意味交渉の種類	70
6.2	日本語力の異なる組における意味交渉の特徴	74
第7章	日本語教育への提言および今後の課題	77
	引用文献	- 1 -
	参考文献	a
	巻末資料	I

日本語母語話者（NS）と日本語非母語話者（NNS）が参加する接触場面のインタラクシオンにおいて、コミュニケーション上で何らかの問題が生じた場合、それを解決するために会話参加者同士が母語場面と異なる、接触場面に特有な様々な言語調整行動を行うことが知られている（ネウストプニー1985；ファン 1994）。本研究はこれまでの先行研究を踏まえながら、中日接触場面の特殊性を考慮し、接触場面における意味交渉に着目し、NS と NNS の言語調整行動を考察したものである。その実態を解明するために、次の2つの研究課題を設定した。1) 意味交渉に現れた調整には全体的にどのような特徴がみられるか。2) NS と NNS による調整にはそれぞれどのような特徴がみられるか。

まず、本研究はデータに表れた意味交渉の特徴を交渉の内容および調整のやりとり数の双方から分析した。その結果、会話参加者はインタラクシオンの意味を理解しあうために、「言語上の意味にかかわる交渉」「専門的知識にかかわる会話上の交渉」のほか、従来の「意味」という分野だけではカテゴリー化できない「言語形式にかかわる会話上の交渉」を行っていることが明らかになった。そこから、意味交渉において、NNS と NS が留意したのは意味のみならず、言語形式上の問題もあったことが分かった。

【RQ1】については、全体的な調整行動使用の特徴として、以下のようなものが見られた。1) 「音声情報による調整」と「視覚情報による調整」の組み合わせ、そしてそれぞれの下位項目の種類に豊かなバリエーションが見られた。2) 音声情報による調整において、達成促進型調整が最も頻繁に使われていることが明らかになった。また、これらの達成促進型調整は発話者が適切な単語を探すまたは音声化する過程で生じたものであり、頻繁に「言い直し」や「言い換え」の前に生じる傾向が観察された。それが話し手の「言い直し」または「言い換え」の前兆として、聞き手に解釈される可能性があることから、達成促進型調整は問題解決の時間を確保し、意味交渉の達成にプラスの影響を与えることが示唆された。

3) 視覚情報による調整において、視覚情報の提示よりも、筆談のほうが9割以上使われていることが明らかになった。また、筆談は、コミュニケーション上の問題発生後の解決策として使われるのみならず、問題を防ぐためにも使われていることも見られた。さらに、交渉対象が人名や地名などを含む固有名詞や中国語と日本語の共通語彙である場合、筆談という調整が迅速かつ効果的に問題解決を図る方策であることが窺えた。

【RQ2】については、NS が行った調整には、1) 達成促進型を多用し NNS の発話を促す、2) NNS の発話を繰り返したり、情報を求めたりするという形で確認し、積極的に NNS の発話意図を推測する 3) 理解が進んだ時点で明確な理解表明のサインを出したり、NNS の言語産出を援助したりする、といった特徴が多く見られた。

また、NNS の言語調整行動には「コード変換」「概念」「完成要求」「確認要求」「理解促進」「達成促進調整」「筆談」という7つの種類が観察され、日本語力にかかわらず、NNS は意味交渉が行われる際に、目標言語に基づく調整を頻繁に使用する傾向が強いことが分かった。また、日本語力の充分でない NNS でも、NS の調整を受けることによって、自らの用いていた調整を評価し、NS の調整に応じて、多様な調整を行うことができることが観察された。だが、日本語力の充分でない NNS による調整が日本語力の高い NNS より多く「コード」と「筆談」を使用して

ていることから、日本語力の充分でない NNS は日本語と中国語の共通言語に依存して調整を行っていることも示唆された。一方、日本語力の高い NNS は「理解促進」をより多く行い、慎重に相手の理解の度合いについて確認しながら、適宜な情報を与え、相手の理解を促進していることや話題の開始および転換を宣言するという言語ホストに準ずる役割意識も見られた。

その結果から、中日接触場面における会話参加者の言語調整行動の使用の一端が明らかにされた。今後、中日接触場面における筆談の使用の有効性と問題性について実証研究を重ね、議論を深めることを課題とする。また、会話参加者の属性や場面などの要素を視野に入れて、中日接触場面の調整行動に影響を与える要因について考察を深めていきたい。

## 【参考文献】

- 青山文啓 (2007) 「反復のタイポロジー：講義の行動に見る旋回と推移」『日本語教育連絡会議 論文集』19, 10-25.
- 尾崎明人 (1992) 「聞き返しのストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』, 225-263.
- 谷莎 (2015) 『接触場面における上級日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー』 桜美林大学修士論文
- 佐々木由美 (2006) 『異文化間コミュニケーションにおける相互作用管理方略—文化スキーマ 分析的アプローチ』 風間書房
- Savignon, S. J. (2009) 草野ハベル清子・佐藤・嘉・田中春美 (訳) 『コミュニケーション能力—理論と実践』 法政大学出版局
- 徳永あかね (2000) 「接触場面における意味交渉の母語話者の発話-pushdown に注目した分析の 個々試み—」『接触場面の言語管理研究』 vol. 1, 25-34.
- ネウストプニー, J.V. (1995) 『新しい日本語教育のため』 大修館書店.
- 春口淳一 (2004) 「言語ホストとしての上級学習者の自己参加調整ストラテジー—第三者言語 接触場面における会話参加の一考察—」『千葉大学日本文化論叢』5, 86-73.
- 一二三朋子 (2002) 『接触場面における共生的学習の可能性—意識面と発話内容面からの考察』, 風間書房
- 藤長かおる (1996) 「初級中日本語学習者のコミュニケーション能力についての一考察—話し手 としてのコミュニケーション・ストラテジーの観察—」『日本語国際センター紀要』6, 51-69.
- 方穎琳 (2010) 「接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー の使用—意味伝達問題を解決するための達成ストラテジーを中心に」『言語文化と日本語 教育』39, 122-131.
- 方穎琳 (2013) 「接触場面での意味交渉におけるコミュニケーション方略—習熟度の異なる日 本語学習者による連続調整に着目して—」『留学生教育』18, 55-64.
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』, くろしお出版
- 宮崎里司 (2002) 「第二言語研究における意味交渉の課題」『早稲田大学日本語教育研究』1, 71-88
- 宮副ウォン裕子 (1995) 「香港人と日本人の接触場面に見られる筆談について」『平成7年度 日本語教育学会秋季大会予稿集』, 129-134.
- 宮副ウォン裕子 (2003) 「多言語職場の同僚たちは何を伝え合ったか—仕事関連外話題におけ る会話上の交渉—」宮崎里司/ヘレン・マリオット (編) 『接触場面と日本語教育：ネウス トプニーのインパクト』, 165-184.
- 村上かおり (1997) 「日本語母語話者の「意味交渉」に非母語話者との接触経験が及ぼす影響— 母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて—」『世界の日本語教育』7, 137-155.
- 柳田直美 (2009) 「接触場面における母語話者の情報やりとりの特徴の記述：情報やりとりの 発話カテゴリーの設定に向けて」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』24, 51-68.